

# Castles Built by the Kumano-Suigun Navy: Atagi-shi-jokan Castle Ruins Designated As a Historic Site

## 熊野水軍が築いた城館 — 史跡安宅氏城館跡を中心に —

佐藤純一

SATO Junichi

### 【要旨】

熊野（紀伊半島南部）において、熊野水軍として活躍した安宅氏が、鎌倉時代末期から南北朝期の動乱を経て、室町・戦国期の紀伊国の複雑な政治情勢の中で、熊野水軍として、自立的に自らの領域を支配するために築いた城館群が、史跡安宅氏城館跡である。史跡安宅氏城館跡は、それぞれが固有の役割・性格を担っていた5箇所（城館跡）からなる。

この史跡安宅氏城館跡を軸として、熊野における熊野水軍と呼ばれる在地の領主層と彼らが築いた城館について、おもに考古資料と文字資料を用いて、検討を進め、熊野水軍の特質について触れた。

考古資料からは、瀬戸内地方と東海地方の双方向からの視点で、それぞれ播磨型土鍋と南伊勢系土師器を取り上げ、検討した。また、文字資料からは、日置川河口部に位置する出月宮の大永三年の棟札（写）における奉加に係わる地名の分布より、安宅氏及び安宅氏城館跡の動態について読み解いた。これらの検討から、水軍領主である安宅氏の広域的な活動の一端を垣間見ることが出来る。

さらに、安宅氏以外の熊野水軍の城館について概述し、それぞれの水軍領主の特質と地域ごとの様相について、把握した。熊野において、「海への意識」をもった立地を持つ城館の存在を指摘し、それらは安宅氏城館跡でも確認されるものであった。

熊野水軍が築いた城館の規模・分布については、熊野三山の影響の多寡に起因すると考え、安宅氏城館跡を素材に検討したが、今後は他の熊野水軍の城館の動態の把握と比較検討を進めていかなければならない。

### キーワード

熊野水軍、中世城館、棟札、考古資料、史跡安宅氏城館跡、「海への意識」

## はじめに

熊野という響きがもたらすイメージは多様である。深山幽谷たる山々の連なり、苔むす石畳が敷かれた聖地と聖地を結ぶ古き道。だが、そこには忘れてはならない海、という視点がある。紀伊半島南部を占める熊野において、海からの視点は歴史上欠くべからざるものであった。神武東征の航路として、また徐福の補陀落渡海の出航地として、いにしえからの伝説に彩られた地域である。なお、本稿における熊野の範囲は、図1に示したとおりだが、便宜的に田辺湾沿岸から尾鷲湾沿岸を結ぶラインより以南の範囲を指す<sup>1)</sup>。

熊野の海は、紀伊半島の東側を熊野灘、西側を枯木灘と呼ぶ。

紀伊半島は、大陸プレートに海洋プレートが沈み込む影響を受け、太平洋に突き出す形で隆起している。時代が古い順に、付加体、前弧海盆堆積体、火成岩体から形成され、それぞれの地域で特徴的な景観をみせている。その最たるものが、本州最南端の町である串本町の橋杭岩（国指定天然記念物・名勝）である。橋杭岩は、前弧海盆堆積体のひとつである熊野層群の割れ目にマグマが列状に貫入し、冷えて固まることにより火成岩となったもので、その後の海水の浸食により、柔らかい熊野層群が削られ、火成岩の一部も崩れた。その崩れた火成岩が、津波等の波の作用により遠くへ運ばれ、現在の巨大な岩があたかも橋脚のように続く奇岩の様相を呈するのである。橋杭岩に代表されるジオサイトは、観光地としてだけでなく、「南紀熊野ジオパーク」としても、近年とみに名高い<sup>2)</sup>。

山深い紀伊山地であるが、イメージに反してその標高は一〇〇〇m前後と比較的低い山々が重なりあっている。この熊野の重なり合う山塊を、熊野川・太田川・古座川・日置川・富田川といった中小河川が穿

ち、穿入蛇行や環流丘陵といった景観をみせる。河口部の沖積平野を除けば、平坦地はほとんどなく、わずかな河床盆地や河岸段丘、山の緩斜面を熊野の人々は生活の場としていたのである<sup>3)</sup>。そして、このような熊野の厳しい地勢が、のちに熊野水軍と呼ばれるひとびとを育んだのである。

熊野水軍の定義は、近年高橋修氏ら先学の研究を踏まえ、坂本亮太氏による「熊野に拠点を有して活動する武士団（熊野の武士たち）の総称であり、史料的には「熊野衆」「熊野悪党」「熊野海賊」なども表される」という定義づけがなされており、本稿でも基本的にそれに従う。本稿では、その定義における内実を探るべく、熊野水軍が築いた城館及びその動態について検討することを主題とする。

### 一 安宅氏と史跡安宅氏城館跡について

中世期、安宅氏と称する一族がいた。今回取り上げる和歌山県日置川流域の安宅氏以外にも、阿波や淡路においても、その活躍の場を広げていた。著名なところでは、三好長慶の弟の安宅冬康が挙げられ、淡路島に安宅八家衆と呼ばれる一族衆により、いくつもの城館を築いたとされる。阿波国にも、安宅という地名が残るとともに、中世の国人領主としても名が残されている<sup>4)</sup>。

以下で、（日置川流域の）安宅氏と史跡安宅氏城館跡の概要について、述べたい<sup>5)</sup>。

安宅氏は、鎌倉時代後期に執権北条氏によって阿波国より派遣された一族と伝わる。もともと安宅氏が拠点とした安宅荘（白浜町・日置川下流域）は「関東成敗地」として北条氏の影響が強い土地柄であったが、同時期に「熊野海賊」が紀伊半島沿岸部を中心に猛威を振るっており、それらを抑える役割を担ったのが、安宅氏と考えられている。その後、

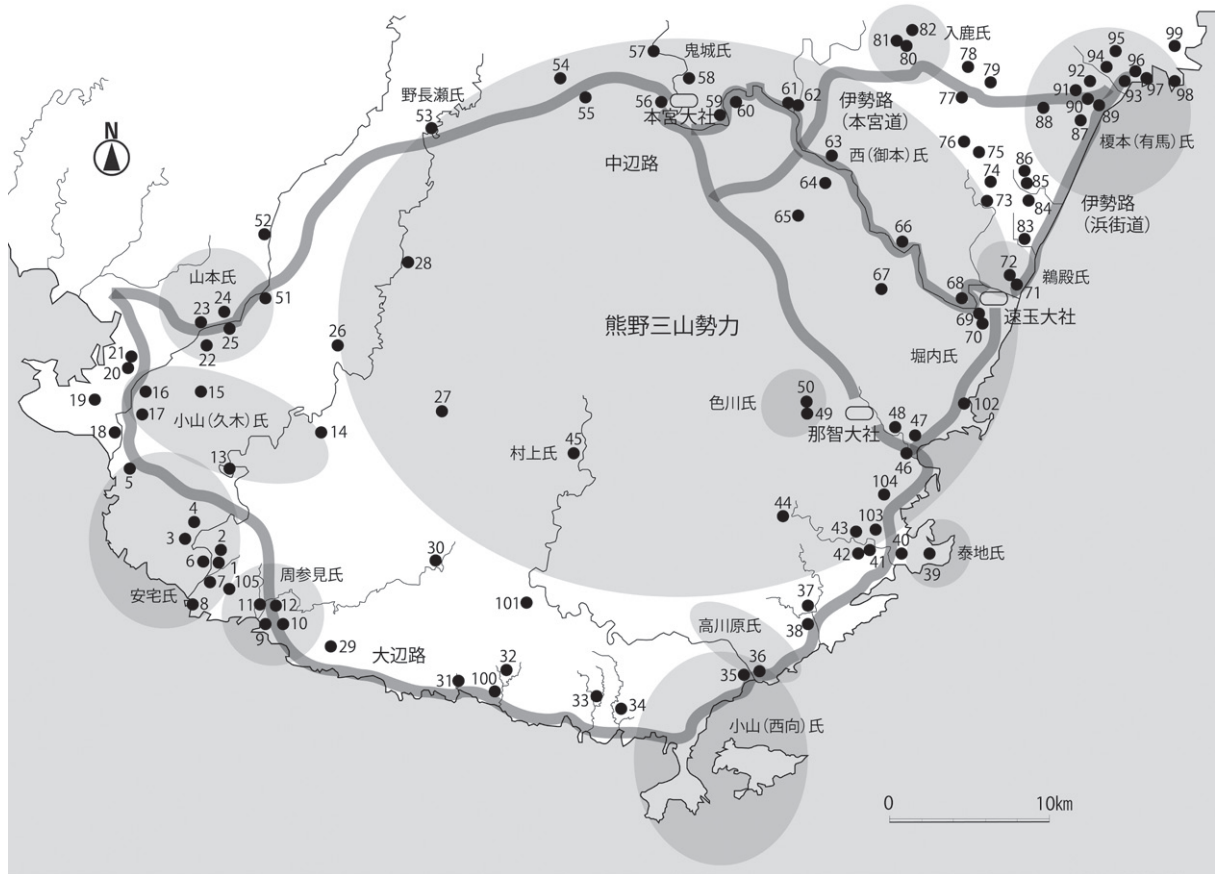


図1 熊野水軍及び中世城館分布図（網掛部は、各勢力範囲のイメージを表現する）

1 安宅氏居館跡	和歌山県白浜町（旧日置川町）	36 古城山城跡	和歌山県串本町（旧古座町）	71 鶴殿城跡・鶴殿西遺跡	三重県紀宝町（旧鶴殿村）
2 八幡山城跡	和歌山県白浜町（旧日置川町）	37 佐部城跡	和歌山県串本町（旧古座町）	72 飯盛城跡	三重県紀宝町（旧鶴殿村）
3 中山城跡（田野井）	和歌山県白浜町（旧日置川町）	38 岩屋城跡	和歌山県串本町（旧古座町）	73 京城跡	三重県紀宝町
4 土井城跡	和歌山県白浜町（旧日置川町）	39 太地城跡	和歌山県太地町	74 平尾井城跡	三重県紀宝町
5 妻善山城跡（高瀬）	和歌山県白浜町	40 下里城跡	和歌山県那智勝浦町	75 下桐原城跡	三重県紀宝町
6 大野城跡	和歌山県白浜町（旧日置川町）	41 尾拾山城跡	和歌山県那智勝浦町	76 上桐原城跡	三重県紀宝町
7 勝山城跡	和歌山県白浜町（旧日置川町）	42 庄の山城跡	和歌山県那智勝浦町	77 倉上城跡	三重県御浜町
8 大向出城跡	和歌山県白浜町（旧日置川町）	43 御社の森城跡	和歌山県那智勝浦町	78 川瀬城跡	三重県御浜町
9 周参見城跡	和歌山県すさみ町	44 小匠城跡	和歌山県那智勝浦町	79 尾島志城跡	三重県御浜町
10 藤原城跡	和歌山県すさみ町	45 西川遺跡	和歌山県古座川町	80 小栗須堂ヶ谷城跡	三重県熊野市（旧紀和町）
11 中山城跡（周参見）	和歌山県すさみ町	46 藤合城跡	和歌山県那智勝浦町	81 小栗須城跡	三重県熊野市（旧紀和町）
12 神田城跡	和歌山県すさみ町	47 勝山城跡	和歌山県那智勝浦町	82 大栗須城跡	三重県熊野市（旧紀和町）
13 向平城跡	和歌山県白浜町（旧日置川町）	48 石倉山城跡	和歌山県那智勝浦町	83 阿田和城跡	三重県御浜町
14 市鹿野城跡	和歌山県白浜町（旧日置川町）	49 弥ノ森城跡	和歌山県那智勝浦町	84 上市木城上城跡	三重県御浜町
15 蛇喰城跡	和歌山県白浜町/上富田町	50 城ノ森城跡	和歌山県那智勝浦町	85 市木城跡	三重県御浜町
16 鴻巣城跡	和歌山県白浜町	51 宮代城跡	和歌山県田辺市（旧大塔村）	86 岡ノ峯城跡	三重県御浜町
17 血深城跡	和歌山県白浜町	52 真砂氏城館跡	和歌山県田辺市（旧中辺路町）	87 高屋城跡	三重県熊野市
18 祇園山本陣跡	和歌山県白浜町	53 千丈山城跡	和歌山県田辺市（旧中辺路町）	88 金山宮ノ口・要害山城跡	三重県熊野市
19 妻善山城跡（堅田）	和歌山県白浜町	54 湊川氏城館跡	和歌山県田辺市（旧中辺路町）	89 口有馬城跡	三重県熊野市
20 野田城跡	和歌山県上富田町	55 妻善森山城跡	和歌山県田辺市（旧中辺路町）	90 有馬城跡（有馬古城跡）	三重県熊野市
21 塗屋城跡	和歌山県上富田町	56 本宮城跡	和歌山県田辺市（日本宮町）	91 向山城跡	三重県熊野市
22 釣瓶山城跡	和歌山県上富田町	57 鬼ヶ城跡（本宮）	和歌山県田辺市（日本宮町）	92 ニツ石城跡	三重県熊野市
23 国陣山城跡	和歌山県上富田町	58 鷹須山城跡	和歌山県田辺市（日本宮町）	93 大本妻善山城跡	三重県熊野市
24 竜松山城跡	和歌山県上富田町	59 小津荷鬼ヶ城跡	和歌山県田辺市（日本宮町）	94 井土峯城跡	三重県熊野市
25 坂本付城跡	和歌山県上富田町	60 敷屋城跡	和歌山県新宮市（旧熊野川町）	95 榎ノ尾城跡	三重県熊野市
26 深谷城跡	和歌山県田辺市（旧大塔村）	61 宮井城ノ元城跡	和歌山県新宮市（旧熊野川町）	96 脇ノ浜城跡	三重県熊野市
27 原内城跡	和歌山県田辺市（旧大塔村）	62 宮井城ノ鼻城跡	和歌山県新宮市（旧熊野川町）	97 鬼ヶ城跡	三重県熊野市
28 打越城跡	和歌山県田辺市（旧大塔村）	63 和気城跡	三重県熊野市（旧紀和町）	98 猪ノ鼻城跡	三重県熊野市
29 松本氏居館跡	和歌山県すさみ町	64 能城城跡	和歌山県新宮市（旧熊野川町）	99 京奈尾・波田須城跡	三重県熊野市
30 大谷城跡	和歌山県すさみ町	65 輝宅城跡	和歌山県新宮市（旧熊野川町）	100 和深浦城跡	和歌山県串本町
31 里野中山城跡	和歌山県すさみ町	66 浅里城跡	三重県紀宝町	101 三尾川中村城跡	和歌山県古座川町
32 虎松山城跡	和歌山県串本町	67 高田古城山城跡	和歌山県新宮市	102 殿和田の森城跡	和歌山県新宮市
33 田並上城跡	和歌山県串本町	68 檜杖城跡	三重県紀宝町	103 市屋城跡	和歌山県那智勝浦町
34 結城城跡	和歌山県串本町	69 越路城跡	和歌山県新宮市	104 二河城の森城跡	和歌山県那智勝浦町
35 小山城跡	和歌山県串本町（旧古座町）	70 阿婦曾城跡	和歌山県新宮市	105 古武ノ森城跡	和歌山県白浜町（旧日置川町）

表1 中世城館一覧表

六波羅探題である北条仲時に殉じ、勢力を減退させるが、南北朝期の動乱の中、主に北朝方（室町幕府方）として、淡路島の海賊退治や紀伊水道を挟んだ阿波国の所領経営を任されるといった水軍領主としての活動がみられる。

室町期の安宅氏は、紀伊国守護の畠山氏との関わりが深まっていく。応仁の乱以降の紀伊国では、畠山氏が畠山義就・義英派と畠山政長・尚順（尚慶・卜山）派と二分して争っていたが、それ以外にも熊野三山をはじめとする宗教勢力、室町幕府奉公衆（山本氏・湯河氏・玉置氏等）や在地領主層（安宅氏・久木小山氏・周参見氏等）といった各勢力が、それぞれの利害関係のもと協同と敵対を繰り返しており、複雑な様相を示していた。

文亀年間頃には、安宅氏が詰めていた「安宅南要害」（勝山城に比定）防衛の命令が、畠山尚順から久木小山氏へ下されている。また、畠山種長（尚順の子）より動員の命令を受け、久木小山氏とともに、奉公衆山本氏の居城・龍松山城（弘誓寺城）に援軍として派遣され、武功を挙げている（永正十八年（一五二二）～天文十一年（一五四二））。このように戦国期の安宅氏は、両畠山氏の抗争に巻き込まれるなかで、主に畠山尚順―種長派として、久木小山氏とともに活動していた。

織豊期の安宅氏は、秀吉の紀州攻めにより帰順し、豊臣家の水軍の一派として活躍することとなる。近世期においては、紀州藩の地士として地域では影響力を持つ存在であった。

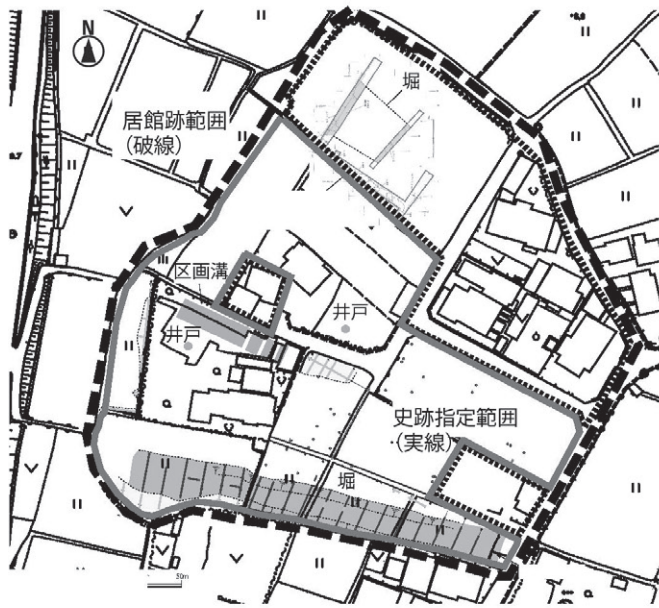
安宅氏は、久木小山氏と共同で日置川流域の山林を管理しており、大坂城の普請にあたるなどといった材木運送全般を取り仕切っていた。熊野水軍により紀伊半島から海路で運ばれた物資の代表として森林資源（材木・檜皮）が挙げられており、安宅氏も例に漏れず日置川流域の森林資源を掌握していたようである。また、室町期も同様に山林を支配し、材木運送にも携わっていたと想定される。

近世期には、日置や大野・古屋（大古）に廻船中があったことが知られ、とくに日置浦においては、日出神社（出月宮）を中心に、湊や木材の土場が立地し、神社を中心に発展していったことが伺える。日出神社（出月宮）は、安宅氏による造営を果たしたことを示す大永三年（一五二三）の棟札が残っていたと伝わり、日置湊についても十六世紀代に廻る可能性が高い。廻船は、日置浦に十五艘、古屋村に五艘、大野村に八艘あった。日置川中流域の寺山村の百姓が、和船の船材である梶木を日置や大野へ送り下している史料が残っており、近世に遡って造船業が営まれていたと考えられる。

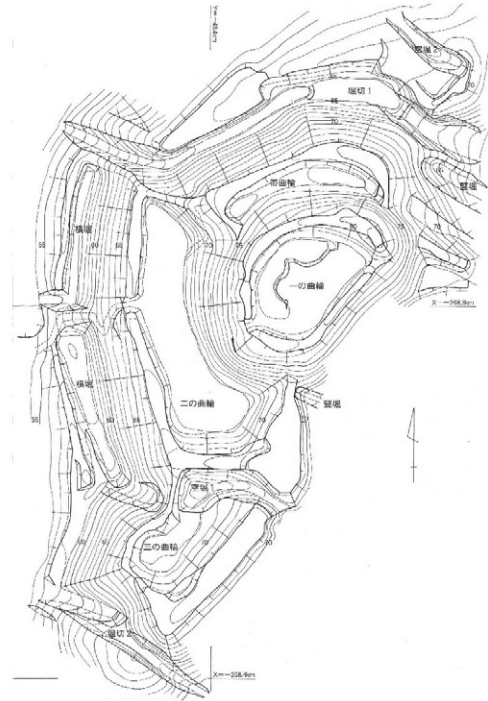
このように紀伊半島南岸部において、熊野水軍として活躍した安宅氏が、鎌倉時代末期から南北朝期の動乱を経て、室町・戦国期の紀伊国の複雑な政治情勢の中で、熊野水軍（水軍領主）として、自立的に自らの領域を支配するために築いた城館群が、史跡安宅氏城館跡である。史跡安宅氏城館跡は、それぞれが固有の役割・性格を担っていた五箇所（城館跡）からなる（図2）。

①安宅氏居館跡は、日置川河口部付近の微高地上に立地しており、海上交通・流通に特化した熊野水軍安宅氏の本拠地である。小字「城ノ内」を中心に、幅約一〇m程度の堀で北側と南側を区画し、西側は自然地形により低湿地状となっていたと想定される。東と南側の区画については、地下レーダ探査の調査成果による。居館跡の規模は、南北約一二〇m、東西約一〇〇mの不整形な台形状を呈する。本拠としての本城跡は、中世期を通じて営まれていたと考えられ、十六世紀末～十七世紀初頭から前半頃には廃絶され、近世から現代にかけて田畑となっていた。その後、昭和二十～三十年代に再開発され、宅地化している。出土遺物から、紀伊半島を中心とする東西双方向からの交易・交流の様相を確認することができる。東側からは、山茶碗・南伊勢系土師器・常滑焼・瀬戸美濃系陶器、西側からは、瓦器・播磨型土鍋・備前焼などが搬入して





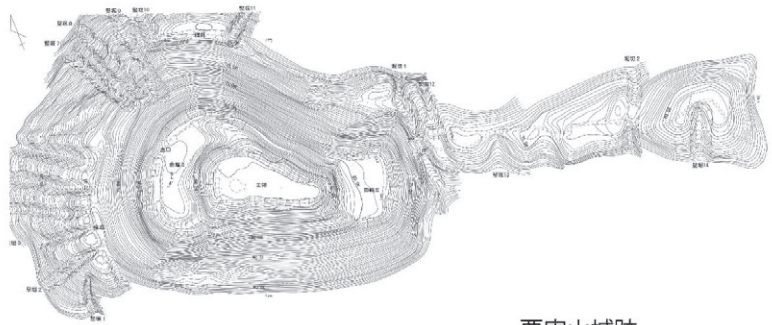
安宅氏居館跡



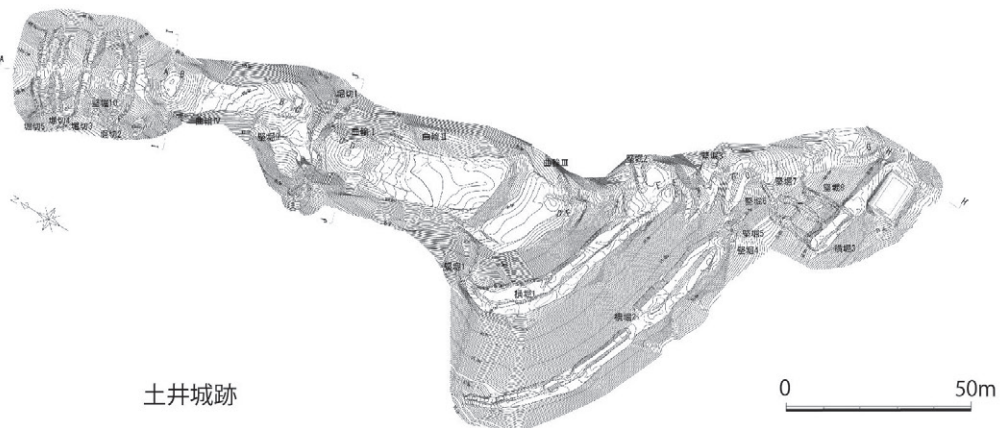
八幡山城跡



中山城跡



要害山城跡



土井城跡

図2 史跡安宅氏城館跡 測量図

いる。

安宅氏居館跡の特徴として、河川からの比高の著しく低い微高地に営まれており、常に水害の危険があったことが指摘されている。安宅氏があえて、この地に本拠を築いた理由として、水運の利便性を追及したことが挙げられ、船着場が居館と隣接する形で想定されていることも関連する。さらに十六世紀前半代には、領域内の寺社整備と関連して、日置湊の整備も進められたと考えられ、日置湊から安宅の船着場・本拠への連携が想定できる。ちなみに安宅本城跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地名となっており、その「安宅本城跡」内に、「史跡安宅氏居館跡」の指定範囲が包含されている。

②八幡山城跡は、安宅氏居館跡の「詰めの城」であり、根小屋式山城となる。南北約二〇〇m、東西約一二〇mの規模を測り、最高所は標高約八〇mである。尾根上の先端に位置しており、急傾斜かつ深田池がある東側を除いた三方向に、遮断施設（横堀・堀切）を設けることにより、城域の内外を明確に区画する構造となっている。発掘調査により、二時期の遺構面が確認され、最終遺構面は火災に遭った後には再利用されていない。出土した遺物から、十五世紀後半から十六世紀初頭に城が機能していたと考えられる。

③中山城跡は、安宅地域よりやや日置川を遡った田野井地域に位置する。環流丘陵となっており、現流路と旧流路が形成した谷によって、独立丘陵状を呈している。最高所は約三八mを測り、大小二つの方形の曲輪が組み合わさる。その構造から「館城」としての評価もされており、田野井地域の支配の拠点と考えられる。遺物の出土量は、八幡山城跡・要害山城跡と比較して非常に少ないが、十五世紀後半から十六世紀初頭を主としながら、十六世紀後半や十七世紀前半の遺物も出土している点が注目される。他の山城と異なる出土状況は城の位置づけを考える上で重要である。

④土井城跡は、富田荘から安宅荘への街道沿いの丘陵上に築かれている。南北約二四〇m、東西約八〇mの規模を測り、尾根筋の自然地形を活かした堅城である。境目の城である「要害山城跡」とは、熊野参詣道大辺路を介して、対となる城跡であり、安宅荘への北側入口となる要地を占めている。そのため、投入された土木量も大きく、築城技術が概して高いのが特徴である。発掘調査が実施されていないため、時期の把握は困難だが、十五世紀後半から十六世紀代の備前焼甕の底部片が表採されている。(図3-10) 残存長七・三cm、復元底部径二九・二cmを測り、外面の色調が暗赤褐色(5YR 3/4)を呈する。破片資料のため判断が難しいが、間壁編年のIV期後半からV期前半代に比定される<sup>⑤</sup>。これまで時期比定の資料に恵まれていなかった土井城跡の年代観を考えるうえで重要な資料となる。

⑤要害山城跡は、熊野参詣道大辺路富田坂を通じて連携している境目の城(富田荘との境)である。安宅氏の最前線基地として、富田荘(奉公衆山本氏の領域)側の斜面に対してのみ畝状空堀群を設け、防御性を高めている。山本氏は、明応四年(一四九五)時点において、義就流畠山氏派(基家)として活動しており、政長流畠山氏派(尚順)である安宅氏とは一時的に敵対関係にあったとみられる。出土した遺物から、城跡が機能していたのも同時期であり、城館の位置づけが明確な例となる。この他にも、安宅荘域内を見渡せる標高約二二・二mの勝山城、河川交通の要衝を抑える大野城跡、岬の先端に位置し海上交通の見張りの役割を担う大向出城跡が、安宅氏に関連する城館として注目され、今後の詳細な調査や追加指定が望まれる。

## 二 考古資料からみた安宅氏と安宅氏城館跡の動態

史跡安宅氏城館跡から出土した考古資料の組成については、別稿に譲

る(本書資料編Ⅱ・考古資料 二 史跡安宅氏城館跡の遺物組成)。ここでは特徴的な遺物から、安宅氏と安宅氏城館跡の実態に迫りたい。城館跡からは多くの中世期の遺物が出土するが、その時期比定については、輸入陶磁器、国産陶器、土師器からおこなわれることが多い。しかしながら、長期の耐用年数が見込まれ、伝世品の可能性がある輸入陶磁器、国産陶器から時期比定を行うことは、慎重にならざるを得ないのである。

それでは、熊野で編年を組むことは可能であろうか。熊野は、在地の土器生産を行っていない地域と見做されており、<sup>⑨</sup>そもそも発掘調査事例の少なさと相まって、土師皿の編年も組まれない状況である。

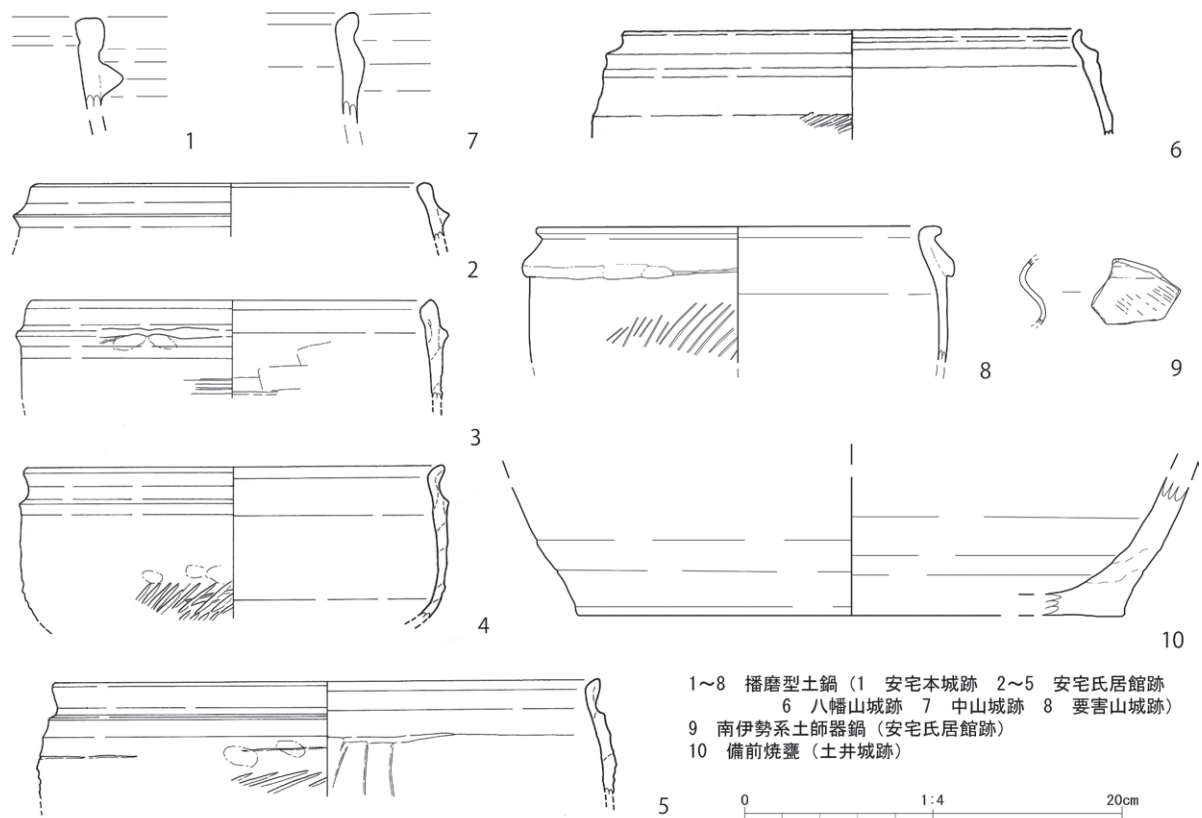
ここでは搬入土器ではあるが、消費スパンが短期間と想定される土製煮炊具(土鍋)の出土状況を踏まえ、改めて時期比定や分布について検討したい。

安宅氏城館跡で確認できる土製煮炊具は、いわゆる播磨型土鍋と南伊勢系土師器の鍋である。まずは、出土量が多い播磨型土鍋からとりあげる。ここでは、基本的に長谷川編年に準拠する。<sup>⑩</sup>

安宅氏城館跡では、安宅本城跡(安宅氏居館跡)、八幡山城跡、中山城跡、要害山城跡から、V期〜VII期にわたり出土する。(図3-1〜8)発掘調査が実施された城館からは、その量の多寡は別として、すべて播磨型土鍋が出土する。V期は十五世紀前半、VI期は十五世紀後半から十六世紀初頭頃、VII期は十六世紀中葉から後半代に比定される。

V期は、ごく少量の搬入とみられるが、堺環濠都市遺跡や熊野東部の川関遺跡(那智勝浦町)と、ほぼ同時期に搬入されている点が意義深い。(図3-1)小片であるが、鏝部の断面三角形形状の貼付突帯が明瞭に確認される。また、口縁端部内面のナデによる凹線もはっきりと残る。

VI期の播磨型土鍋には、口縁部が短く外反するものとまっすぐ立ち上



1~8 播磨型土鍋 (1 安宅本城跡 2~5 安宅氏居館跡  
6 八幡山城跡 7 中山城跡 8 要害山城跡)  
9 南伊勢系土師器鍋 (安宅氏居館跡)  
10 備前焼甕 (土井城跡)

図3 史跡安宅氏城館跡 出土遺物実測図



がるものが認められる。安宅氏城館跡では、当該期の出土が最も多く、安宅氏居館跡(図3-2、4)、八幡山城跡(図3-6)、中山城跡(図2-7)、要害山城跡(図3-8)で確認できる。とくに安宅氏居館跡以外では、当該時期の播磨型土鍋しか出土しない。ただし、VI期としたものでも銜部や口縁部の形状が異なることから、型式差かVI期の範疇でも時期幅を持つ可能性がある。VI期〜VII期にかけては、ほぼ一世紀近い年代観の幅があるため、細分化が必要とされる。また、図3-3や図3-8に認められるように、突帯の先端部を意図的にナデにより平坦にし、断面方形形状を志向する。いずれも、突帯の全周囲に施すわけではなく、一部分に限定される点も共通する。この技法については、安宅氏居館跡と要害山城跡で確認されるが、要害山城跡出土の播磨型土鍋に多い傾向がみてとれる。これらの意味合いについては、現時点では不明であるが、他の類例と比較検討したい。

VII期の銜部については、形状的には同じ段状を呈するものであっても、貼り付け表現でなく、ナデにより段差を表現するものである。安宅氏居館跡(図3-5)で出土する。

播磨型土鍋は、安宅氏居館跡において、V期からVII期にかけて継続的に出土する一方、八幡山城跡や要害山城跡ではVI期に集中して出土している。これらの出土状況は、これまでの城館の年代観と矛盾するものではない。

南伊勢系土師器の鍋は、安宅氏居館跡から二点出土している。うち一点のみ凶化可能であった。(図3-9)小片であるが、特徴的な器壁の薄さとハケ目調整が確認され、中世後期に属するものとみられる。南伊勢系土師器は、古墳時代以来の伝統を有している酸化焰焼成の土器である。近現代まで素焼き・手ごねの土器を生産し続ける南伊勢地域で生産され、その背景には神宮の存在があったと指摘されている。

分布地域は、中世前期(鎌倉期)と中世後期(室町・戦国期)で変動

がある。中世前期では、集中的に分布する南伊勢地域、志摩地域のほか、東海沿岸地域に一定量が分布するとともに、東北や九州など遠方にも点的な分布が広がる。また、鎌倉に安定した分布がみられる。中世後期においては、分布の中心域に大きな変化はないが、拡散的な状況が収斂していく様相がみられる。一遺跡における出土数が一〜二点であるが、紀伊(熊野)東部、尾張、三河、遠江など固定的な状況を示す。これらの分布状況から、南伊勢系土師器は、伊勢を起点とした海運との密接な関連が指摘されている。そして、この動向には、神宮神役人で在地土器職人を指揮していたと考えられる有爾御器長と、その配下の工人集団が直接関わり、さらにその後には、神宮や山田の商職人の関与が想定されている。

南伊勢系土師器の中世後期における分布の西限は、これまで川関遺跡(那智山)であったが、安宅氏居館跡で出土したことにより、その西限が熊野西部に面的に広がった。これまでの指摘どおり、東西双方の流通がみられるとともに、ピンポイントで伊勢(神宮)との関わりが想定することができるようになった。

播磨型土鍋とともに瀬戸内海沿岸地域から搬入される代表的な土器として、備前焼が挙げられる。和歌山県内の備前焼については、北野隆亮氏が詳細な検討をされているため、ここでは概要を述べるに留める。県内では、備前焼編年II期に、根来寺周辺ですり鉢が一定量出土することが確認されている。次のIII期においては、紀伊北部の紀ノ川流域をおもな分布域としながらも、紀伊中部から南部の城館にピンポイントで搬入している。そのなかでも、安宅本城跡(安宅氏居館跡)・長寿寺出土例については、分布範囲の南限を示す。この時期の備前焼は鎌倉でも出土しており、その流通経路として太平洋沿岸部を経由した、海上輸送が想定される。IV期・V期にかけて出土例は急激に増加し、紀伊東部でも出土が確認されるようになる。とくにV期の十六世紀に新たな出土地が増



加することが指摘されている。土井城跡の表採資料(図3-10)についても同時期に比定される。

安宅氏城館跡の特色として、周辺地域の城館との比較から備前焼の出土が多いことが挙げられるが、長寿寺出土の紀年銘備前焼大甕(暦応五年「一三四二」)と合わせて、安宅荘における瀬戸内地域との流通や交易の一端を示すひとつの例といえよう。それは、安宅氏が淡路での水軍的な活動や阿波国荘園の地頭職に宛がわれていた事例のように紀淡海峡に勢力を持っていたこと、水ノ子岩の沈没船のバラストが日置川流域から採取された川原石の可能性があると指摘されていることも深く関わってくるものである。

### 三 文字資料からみた安宅氏と安宅氏城館跡の動態

文字資料からみた安宅氏の動向については、高橋修氏らの先行研究をもとに、坂本亮太氏の最近の業績に詳しい<sup>16)</sup>。本章では、文字資料でも、とくに棟札から安宅氏と安宅氏城館跡の動態について検討したい。日置川流域の棟札については、高橋修氏により検討されているが<sup>17)</sup>、先行研究の成果に導かれながら、新たな知見を加えてみたい。

中世期、とくに大永々天文年間頃の日置川流域に本拠を占める領主層は、それぞれが拠点とする村落において、寺社の造営・経営の主体となつていくことは既に指摘されている<sup>18)</sup>。ここでは、大永三年(一五二二)に安宅氏が主となった出月宮(現・日出神社)造立にかかる棟札(写)を取り上げる。なお、本棟札は現存せず、明治二十六年に神社に伝来する棟札類を書き写した古文書中に写しが残されている<sup>19)</sup>。

史料1 出月宮 棟札(写)

【表面】

【裏面】

天下泰平国土豊饒庄内安全 大永三<sup>干時</sup> 癸未 并ニ富田千代寿女  
 泰造立出月宮一字 紀州牟婁郡橋氏安宅大炊助俊  
 一門繁昌所願成就寿命長穩<sup>也</sup> 藤百ノ  
 大工藤原弥右衛門  
 小工藤原<sup>田井実次</sup>  
 へ<sup>正包</sup>

右筆那智山寺尾二位公

大永三年八月吉日 出月宮各志之注文

百文 ぬの一<sup>布</sup> ふうしやう寺<sup>宝勝</sup> 百文 しん三郎<sup>見草</sup>

百文 きおんのこう太郎<sup>祇園</sup> 二百文 ちんしやう<sup>見草</sup>

百文 ひこ衛門 百文 くりすう寺<sup>栗栖</sup> 百文 小三郎<sup>北山</sup>

ぬの一<sup>日世</sup> 太郎四郎 百文 きおん坊<sup>祇園</sup> わた一まい<sup>増川</sup>

ましかわのた<sup>多田</sup>

百文 又

かう一枚<sup>榊</sup> しふやの寺<sup>座思</sup> ぬの三ひろ<sup>天和</sup> きうてん<sup>やまとの</sup>

百文 又二郎<sup>椋谷</sup> 百文 弥三郎殿<sup>山くち</sup>

わた百の分<sup>わた</sup> ふくた殿<sup>福田</sup> わた百の分<sup>宇井ヶ地</sup> なかや殿<sup>ういかち</sup>

百文<sup>(安宅)</sup> しん九郎 一貫四百文<sup>(日懸)</sup> 太郎さへもん

百文<sup>(へきの)</sup> なかしま<sup>(中懸)</sup>

七百文 同 二郎衛門 二百文 同多もん二郎

わた百分<sup>(三たんはたけの)</sup> いや三郎 百文<sup>(入懸)</sup> しんさへもん

百文 むまち殿 ぬの一<sup>(中懸)</sup> こうさへもん

百文 てらやま<sup>(お分の)</sup> 百文又かう一<sup>(矢田)</sup> しゅうけ殿

わた百のふん<sup>(ほうはちの)</sup> 母儀 二百文<sup>(へきの)</sup> 八郎さへもん

二百文 同 せんひやうへ 二百文 同 しゃうたん

百文又刀一<sup>(日懸)</sup> しきふ<sup>(式部)</sup> 二百文<sup>(へきの)</sup> 八郎二郎

百文<sup>(小松懸)</sup> 二郎三郎殿 わた百のふん<sup>(矢田)</sup> 太郎四郎

百文<sup>(大野)</sup> ちせんにん 百文<sup>(百懸)</sup> こうさへもん

百文<sup>(宇井ヶ地)</sup> そうちん守<sup>(ういかち)</sup> くき百ふん<sup>(釘)</sup> 弥太郎<sup>(松懸)</sup>

わた百ふん<sup>(江仕)</sup> や二郎殿<sup>(桑)</sup> 坊まこ太郎殿<sup>(わた百ふん おひ一すち 冊一筋)</sup>

かたな一こし 太郎ひやうへ殿<sup>(野中)</sup> 百文<sup>(又)</sup> ひこ太郎殿<sup>(安宅)</sup>

はな百のふん ひこ太郎母儀 ぬの一 同すけ三郎

ぬの一<sup>(みやもと)</sup> 又三郎<sup>(又)</sup> 百文<sup>(又)</sup> 屋た殿<sup>(矢田)</sup>

三百文<sup>(宇庇)</sup> 太郎さへもん殿 一貫文<sup>(へきの)</sup> 湊きやうさへもん殿

二百文<sup>(へきの)</sup> てら二郎<sup>(へきの)</sup> 百文<sup>(へきの)</sup> なかのあん

わた百のふん<sup>(桑)</sup> しん三郎<sup>(桑)</sup> わた百のふん<sup>(やたの)</sup> いや七

百文<sup>(又)</sup> 御もと殿<sup>(御本)</sup> 二百文<sup>(二和出)</sup> 一わた殿

百文<sup>(又)</sup> しの殿<sup>(二たん)</sup> 百文<sup>(宝蔵)</sup> ふうしやあん<sup>(藤)</sup>

百文<sup>(大の)</sup> しん四郎<sup>(社野)</sup> 百文<sup>(安宅)</sup> こう四郎殿<sup>(あたき)</sup>

ぬの三ひろ<sup>(つちの)</sup> あちや<sup>(藤)</sup> 百文<sup>(藤)</sup> かもん<sup>(藤)</sup>

こう一<sup>(和出)</sup> しんろく<sup>(わたの)</sup> 百文<sup>(口ヶ谷)</sup> ふりはすけ

わた百のふん<sup>(船小)</sup> ひこさへもん<sup>(ふなき)</sup> わた三まい<sup>(口ヶ谷)</sup> まところ<sup>(政)</sup>

わた百ふん<sup>(藤野)</sup> とち二郎<sup>(ふりの)</sup> わた百ふん<sup>(藤)</sup> ひろはた殿

わた百ふん<sup>(とうしゐん)</sup> わた百ふん<sup>(安宅)</sup> 二郎四郎殿母儀

わた一まい 〔小野〕 ちのの 四郎 〔小野〕 ひこ四郎 〔小野〕 わた百ふん 〔小野〕 しんさへもん殿 〔小野〕  
 わた百ふん 〔小野〕 又二〔小野〕郎 〔小野〕 百文 〔小野〕 そう二〔小野〕郎殿 〔小野〕  
 百文 〔金子〕 そう六〔金子〕郎 〔金子〕 二百文 〔金子〕 なかの殿 〔金子〕  
 百文 〔金子〕 ひやうへ二〔金子〕郎 〔金子〕 二百文 〔金子〕 くおうきん寺 〔金子〕  
 わた百ふん 〔江住〕 しん五〔江住〕郎殿 〔江住〕 二百文 〔江住〕 四郎へもん殿 〔江住〕  
 三百文 〔里野浦〕 さとのう〔里野浦〕ら村中 〔里野浦〕 二百文 〔里野浦〕 はやし殿 〔里野浦〕  
 わた百ふん 〔高〕 たかはら 〔高〕 ぬの一 〔高〕 へき殿 〔高〕  
 わた百ふん 〔大斎原〕 すけろく 〔大斎原〕 おひ一〔大斎原〕すち 〔大斎原〕 二〔大斎原〕郎御 〔大斎原〕  
 ぬの三〔安宅〕ひろ 〔安宅〕 てう二〔安宅〕郎 〔安宅〕 百文 〔安宅〕 あたうし殿 〔安宅〕  
 百文 〔安宅〕 なめき 〔安宅〕 百文 〔安宅〕 そうひ〔安宅〕やうへ 〔安宅〕  
 わた百ふん 〔藤野〕 二郎九〔藤野〕郎 〔藤野〕 百文 〔藤野〕 三郎へもん 〔藤野〕  
 百文 〔朝来極〕 かうさへもん 〔朝来極〕 こう一 〔朝来極〕 あさら〔朝来極〕きのち〔朝来極〕け中 〔朝来極〕  
 ぬの一 〔小松原〕 母儀 〔小松原〕 わた三〔小松原〕まい 〔小松原〕 又七〔小松原〕郎 〔小松原〕

わた百ふん 〔江野〕 わう九〔江野〕郎 〔江野〕 百文 〔江野〕 せんさへもん殿 〔江野〕  
 わた百ふん 〔江野〕 し四〔江野〕郎殿 〔江野〕 わた百ふん 〔江野〕 四郎ひ〔江野〕やうへ 〔江野〕  
 こう一〔江住〕たん 〔江住〕 又す〔江住〕みむら中 〔江住〕 わた二〔江住〕百ふん 〔江住〕 ちうせん寺 〔江住〕  
 百文 〔廣谷〕 せんへもん〔廣谷〕両人中 〔廣谷〕 百文 〔廣谷〕 う里〔廣谷〕たに殿 〔廣谷〕  
 百文 〔小松原〕 こまつ〔小松原〕はら殿 〔小松原〕 一寶前 〔小松原〕 すさ〔小松原〕み殿 〔小松原〕  
 おひ三〔和〕すち 〔和〕 四郎三〔和〕郎殿 〔和〕 こう一〔和〕たん 〔和〕 和田殿 〔和〕  
 裏面には、筆者として「那智山寺尾二位君」の名と、「出月宮各志之注文」、いわゆる奉加帳形式で地名・人名・寺社名・寄進内容が記されている。総数で一〇七件を数える記載がある。以下に、その特徴を列挙する。

- ① 人名十殿 「すさみ(周参見)殿」「ひろはた(廣畑)殿」「ふくた(福田)殿」「御もと(本)殿」「二わた(和田)殿」「う里たに(瓜谷)殿」「こまつはら(小松原)殿」など
- ② 地名十人名 「へき(日置)のしきふ(式部)」「あたき(安宅)のひこ太郎殿」「きた山(北山)小三郎」「いるか(入鹿)しんさへもん」「すさみ(周参見)のかもん(掃部)」「さとのうら(里野浦)四郎へもん殿」「あこ(安居)のなめき(生木)」など
- ③ 寺社仏閣 「ふうしやう(宝勝)寺」「しおの(塩野)のくおう



きん(廣金)寺(現在の塩野薬師堂を指す)」「しふや(塩屋)の寺(現在の梵音寺を指す)」「おかうち(小河内)のちうせん(長泉)寺」

④公的機関 「くちかたに(口ヶ谷)まところ(政所)」

⑤村方 「さとのうら(里野浦)村中」「あさらき(朝来帰)

のちけ(地下)中」

まず、頻出する地名について検討したい。

やはり最も多いのが、出月宮が存在する「日置」であり、一七件を数える。読みとしては、「へき」読みとなる。現在のように「ひき」と呼ぶのは、近世に入ってからである。続いて、「矢田」「安宅」といった安宅荘の中心地名が続くが、それぞれ五件、四件と大きく数を減らす。次に「口ヶ谷」「辻野」という田野井から安居の間の地名が三件ずつ出てくることに注目しておきたい。そのほか、日置川河口から安居までの地名が一〇二件ずつ登場する。これらは、現在の大字地名を主とするが、一部にその下位の地名もある。

安宅荘の沿岸部においても、「見草」「朝来帰」「稼谷」「高瀬」といった地名が少なくながらも散見され、要害山城跡を含めた富田川左岸河口部の権益との関連が窺える。また、隣接する周参見荘域の地名も登場する。「周参見」はもとより、海岸沿いの「江住」、「里野(浦)」、内陸に位置する「小河内」といった地名が見受けられる。

以上の地名は、日置川流域の安宅荘、とくに日置を中心とするものであり、出月宮にかかる直接的な信仰が想定できる範囲と見做せる。また、周参見域を除いた日置川下流域から富田川下流域の一部については、当時の安宅荘、つまりは安宅氏の影響力が及ぶ範囲と大枠では一致するものであつたであろう。

次に、日置川流域から遠く離れた地名が現れることについて検討す

る。ほぼ確実に比定できるものとして、「小野」「高原」「野中」「入鹿」「北山」「宇陀」「大和」が挙げられる。これらの地名に共通することは、街道沿いに位置することである。「小野」「高原」「野中」は熊野古道中辺路沿い、「入鹿」「北山」は、本宮街道から北山街道沿いに位置する。さらに北上すると「宇陀」「大和」まで通じている。

これらの街道沿いに分布する地名については、那智山門善坊の旦那場との関連が想定される<sup>20</sup>。門善坊は、「塔尾の聞善坊」を指し、正長二年(一四二九)の『熊野那智大社文書』に初出して以降、実報院の「作人」「大輔阿闍梨」「口入使」といった形で登場している。「門善坊旦那持分指出帳」によれば、安宅・日置の一門は、門善坊の旦那場となつていことがわかる。

出月宮棟札記載地名と重複するものとして、北山・入鹿(板屋含む)・高原・すさみ・藤代(藤白)が挙げられる。出月宮造営にあつて那智山門善坊の御師による自らの旦那場への勧進がなされた可能性があり、那智山による間接的な援助・介入があつたと想定される<sup>21</sup>。

最後に、棟札に現れない地名について触れておきたい。注目したいのは、安宅荘内に含まれる「田野井」や「市江」、日置川中流域にあたる久木小山氏の本拠三箇荘の範囲である。

「田野井」については、近世における田野井村の地区名のひとつである「辻野」という地名(日置川を挟んだ「田野井」の対岸)や、上流の「口ヶ谷」「船木」「藤野」さらに「安居」まで記されているにもかかわらず、一件も現れない。また、烏賊坂越えの山道を通じて、「田野井」と密接な関係にある沿岸部の「市江」についても、周辺の「朝来帰」や「見草」が記されているが、ここでは現れてこない。

田野井地域の在地領主層として、田井氏がいる。田井氏は、これまで安宅氏の被官として理解されてきた一族であるが、特定の時期(十六世紀初頭頃・永正四年前後)においては、安宅氏が属する政長流畠山氏







ろうか。

じつは久木小山氏は、熊野参詣との関わりにおいて、応永三十四年（二四二七）に、三栖王子（田辺市）の高太夫から旦那を買得し、さらに道者の権利を子孫に譲与している。現時点では、実態は不明と言わざるをえないが、これらのことから御師としての側面が指摘されている<sup>26</sup>。先述したように、出月宮の奉加には那智山門善坊による協力（勸進）があったと想定されることから、競合する御師（久木小山氏）の勢力範囲には立ち入らなかつたために、この人名・地名の空白ができたと思えられないだろうか。同じく隣接勢力である周参見氏の場合は、門善坊の旦那があつたことを再確認しておく。牽強付会の誹りを免れえないが、ひとまず现阶段の解釈のひとつとして提示しておきたい。

人名としては、日置川流域周辺でよくみられるものが多いが、たとえば「御もと殿」は、熊野川流域の御本（西）氏に比定することができ、先述の大和に通じる街道との関連が見受けられる。また、「周参見の掃部」は、周参見王子神社の中世期（天文十五年、文禄三年）の棟札に記される「大工 掃部橋助定」との関連を指摘しておきたい。周参見荘域における代表的な大工として名を継承しているとみえ、時期が遡る大永三年時にも存在した可能性が高い。安宅氏の本姓である「橋」を名乗る点にも注意を払っておきたい。

寺社仏閣としては、安宅氏の菩提寺「宝勝寺」や平安期の仏像が祀られている「廣金寺」、すさみ町小河内の「長泉寺」といった現存する寺院のほか、現在では比定が難しいものもある。

そのほか「政所」のような公的な機関や「村中」「地下中」のような村方の奉加がみられる。この場合、日置や安宅といった奉加の中心からやや外れた口ヶ谷、里野（浦）、朝来帰や江住といった地域名がみられ、個々による直接的な奉加ではなく、地域の代表的な意味合いにより奉加したと捉えることができる。

同時期の類例を紐解くと、安宅氏と同じく熊野水軍とみなされる有馬氏（榎本氏）に関連した伊藤裕偉氏による精緻な検討がある<sup>26</sup>。有馬氏により勧請された産田神社には、永正十八年（一五二二）から昭和四年（一九二九）までの合計一〇〇点の棟札が残されており、永正期のものが唯一の中世棟札とされる。この永正十八年の棟札は、両面に文字が記されており、表面と裏面の一部が通常の棟札の記載内容であり、それと筆跡の異なる文字で書かれた裏面全体には、造営にかかる収支とその経緯、関係者に関することが記され、いわゆる算用帳「入道」であるときとされている。「産田二所大明神」が施主の「有馬庄司榎本和泉守忠親」により造立されており、現在の社殿とは異なり、東殿と西殿に分けられていたようである。

この両殿（二所大明神）において、それぞれ造立主体が異なり、東殿は有馬殿（榎本和泉守忠親）と同名中により造立され、西殿は二十四名の禰宜神子衆および有馬山戸想（惣）中の勧進による。また、有馬荘の田一枚につき一束の徴税があり、その範囲として東の「井戸われ石」（獅子岩周か）から、西の「金山伊毛之里」（所在不明）もしくは「九生屋」（現在の熊野市久生屋町）とされている。永正十八年時の産田神社の造営にあたっては、在地領主層である有馬庄司家と有馬荘在地の人々が同じ事業に取り組んでいることがわかる。全体の施主として有馬庄司家の名が記されながらも、領主としての造営とそれ以外の造営とが明確に区分されている点に伊藤氏は注目されている。翻れば、荘民側が領主層との距離を示しているのではないかとの指摘がなされている。

また、同じく大永三年の棟札をもつ日高郡みなべ町の東岩代八幡神社では、在地領主層（地頭）として岩代兵部少輔が中心となり造営がおこなわれている。岩代兵部少輔の名は、天正十年（一五八二）の棟札にもみられ、時期的な問題から同一人物とは考えにくいだが、継続的な領域支配の様相を認められる。表面・裏面ともに奉加者の名が記され、南部荘



の有力者である野原氏、芝氏、堀籠氏とともに、周辺の目良氏（田辺市）や櫻川氏（印南町）といった人物も登場する。そのほか、「念仏衆」や「大夫成」「男成」などが勧進に加わっている。<sup>27)</sup>

二つの類例から考えると、基本的に勧進が行われるのは、同じ荘内もしくはその隣接地域程度となる。これは、出月宮の事例とは大きく内実を異にする。出月宮の造営において遠隔地からの奉加があることは、やはり特異な事例といえるが、今回想定したような御師（熊野三山）の関与によるものかは、今後の詳細な検討やさらなる裏付けを要することは論を俟たない。

このように棟札より安宅氏の動態を探ることができ、さらに安宅氏城館跡の位置づけや分布に反映することも可能となる。とくに要害山城跡は、安宅氏の本拠から遠く離れ、地元の伝承や縄張りから、安宅氏の城館として論じられてきたが、古文書以外の文字資料から改めて裏付けることができた。ただし、今回の大永三年の出月宮棟札はあくまでも写しであり、史料としての取り扱いには十分注意が必要であることは言うまでもない。

#### 四 周参見氏・小山氏・その他の熊野の城館跡について

本章では、安宅氏が築いた城館群以外の熊野の城館跡について概述する。各城館跡の様相については、本報告書の白石博則「熊野地域の港津と城館」も併せて参照されたい。

周参見氏は、安宅氏の支配領域の南側で接しており、周参見川の河口部周辺を本拠としていた。周参見氏の来歴及び活動については判然としない部分が多いが、少なくとも南北朝期には、安宅氏とともに阿波国在所領経営をしており、紀伊水道を挟んだ対岸の阿波国での水軍的な活動がみられる。

周参見城跡、藤原城跡、周参見中山城跡、神田城跡（図1-9、12）が、周参見氏に関連する城跡として挙げられる。これらは、周参見川河口部に開けた沖積平野を中心に築かれており、安宅氏の城館群と同様に集中的に築かれている。とくに藤原城跡は、勝山城跡（図1-7）との縄張りの類似性が指摘されており、築城技術の共有にまで言及されている。<sup>28)</sup>ただし、別稿で述べたとおり、安宅氏と周参見氏間というよりは熊野（のうちでも西部）に共通する築城技法の一種と評価すべきものである。<sup>29)</sup>

また、神田城跡については、二段の曲輪を配置し、その周囲に横堀や畝状空堀群を擁する技巧的な城跡となっている。周参見城跡や周参見中山城跡は、単郭を土塁が巡る単純な構造ではあるが、交通の要衝は押さえる重要な立地である。周参見城跡では、土塁の天端部に川原石の集積が確認できた。周辺の類例や調査成果から、投弾用とみられる。

熊野における小山氏は、大きくは久木小山氏と西向小山氏に分かれる。下野の小山氏の流れを汲むという伝承をもち、鎌倉時代後期に兄弟で熊野に根付いたとされる。ただし、こちらは「こやま」と読む。弟（または兄）とされる小山経幸（久木小山氏）は、日置川中流域の三箇荘を中心に勢力を誇るが、「久木小山家文書」からは、それ以前からの荘官層の存在（久木氏）が指摘されている（本報告書の坂本亮太「総論 熊野水軍小山家文書の総合的研究—熊野の海域史・序論—参照」）。

久木小山氏は、下流の河口部を本拠とした安宅氏とは中世を通じて、繋がりを持っていた。とくに中世後期においては、山林の共同的な権益を持っていたとされ、豊臣家の大規模な普請に関与したり、鹿狩りを目的に小山氏側の山を安宅氏が借り受けようとする詳細なやり取りまで残されている。久木小山氏は、山中の三箇荘を本拠としながらも、日置川河口部や山を越えた富田川流域にも古くから所領を有していたこともわかっており、さらに白浜半島（田辺湾沿岸部）を含む紀伊半島沿岸部に

広く進出していた。

兄弟のうち、兄（または弟）とされる小山実隆（西向小山氏）は、古座川河口部の塩崎荘西向浦を本拠とし、塩崎氏との関係が深く、熊野三山（新宮）の社家であり、「熊野山上綱」と表される。南北朝期の史料からは、海上・沿岸部の活動がみられ、河口部に本拠をもち、古座川中流域を含む山間部との関わりをもっていったようだ。熊野の小山氏は、それぞれの本拠の景観が海と山で大きく異なる特徴があると指摘されている<sup>39</sup>。

このように、広域的に活動する実態が捉えられ、在地領主層としては安宅氏や周参見氏と比肩する存在である小山氏であるが、その領域における城館の様相は大きく異なる。

久木小山氏が本拠とする三箇荘では、向平城跡（図1-13）のみが確認される。向平城跡は、後世の改変を差し引いたとしても、単郭と堀切を有する単純な形態であったとみられる。本拠としては、対岸に屋敷跡（居館跡）が想定される小字名が残っているものの様相を把握することは難しい。もう少し範囲を広げてみて、市鹿野城跡（図1-14）や蛇喰城跡（図1-15）が、久木小山氏と関連する城館の可能性があるが、確定的ではない。

一方、西向小山氏も本拠である小山屋敷と小山城跡（図1-35）を除けば、領域内に顕著な城館は確認されない。小山城跡も曲輪部分が後世の社殿の造成により改変を受けており、城跡に伴う遺構もあまり判然としていない。ただし、海上及び河口部を望む眺望に優れた立地である。

このように安宅氏や周参見氏の城館群との分布・構造の差異は顕著なものであり、城館の多寡や規模によって、築城主体の勢力規模を直截的に計ることはできないにしても、そこには何らかの意味合いが付与されてしかるべきだろう。

小山氏ほどではないにしても、高河原氏（図1-36）や泰地氏（図1-

39）、色川氏（図1-48・49・50）なども文献資料からみた活動実態に比して、城館を築いていない。これらの熊野南東部の在地領主層の動向に注意を払う必要がある。

新宮や那智の領域については、熊野三山や堀内氏の勢力が大きい。とくに戦国後期における堀内氏の勢力伸張と連動して、戦略的に城館が築かれる様相が確認できる。なかでも天正期における、堀内氏の南進政策とともに、那智川流域、太田川流域、田原川流域で城館が確認されている。また、熊野川を挟んで、鵜殿荘を本拠とした鵜殿氏は、新宮問丸・東福寺問丸として活躍するとともに、御師としての活動もみられる。熊野三山の社家のひとつであったようだ。近年、鵜殿西遺跡（図1-71）の発掘調査により、本拠と想定される居館の様相が少しずつ判明してきている。鵜殿西遺跡の背後には、鵜殿城跡が築かれ、熊野川の河口部を抑えている<sup>40</sup>。

今回は、つぶさに触れることはできないが、熊野川や北山川に沿う、山中に拠点を持つ入鹿氏や御本（西）氏の状況も、熊野の城館群を考えるうえで重要である。

次に、文献史料上ではその動向を追うことができず、地元の伝承程度しか記録が残らない小領主層の城館を確認する。串本町和深の虎松山城跡（図1-32）、和深浦城跡（図1-100）、串本町田並の田並上城跡（図1-33）、串本町有田の結城城跡（図1-34）が挙げられる。これらは、周参見氏と西向小山氏の領域のはざま（熊野南西部）に築かれ、その規模は違えど、城館の立地に共通性が認められ、沿岸部から約2kmほど遡った地点に城館を築いている<sup>41</sup>。

さらにその特徴を列挙すると、小河川流域ごとの小規模な地域（社会）を見渡し、また逆に見上げられる立地をとること、小河川の合流地点に位置すること、海岸部を望見できること、城の選地上、曲輪から海が見えない場所に築かなければならない場合、海が見える位置に出丸を

築くことが挙げられる。この出丸を築く行為は、結城城跡で確認される。結城城跡の場合、海が直接望見できる位置にある山の尾根筋が守備に適さない地形のため、やや奥まった位置に城を築いたが、そうすると海岸部が見えにくい立地となったため、尾根を下った位置に出丸を築いたとみられる<sup>35)</sup>。

この特徴は、熊野南東部の佐部城跡(図1-37)でも確認できる。佐部城跡は、田原川を約2kmほど遡った佐部ノ口に位置している。新宮の堀内氏が南進する際の拠点としたとされ、高河原氏・小山氏・その他の熊野西南部の勢力が、「佐部の合戦」において勝利し、堀内氏の侵攻がここでとん挫したと伝わる。また、在地領主層とみなされる田村半之丞が築城したとの伝承も残る。表採資料として、一五世紀中〜後半頃の備前焼や天目茶碗、灰釉陶器が発見されているほか、中世期の石造物が城内で確認されている。曲輪は不整形な柄鏡状を呈し、帯曲輪を備える。北東側のやせ尾根を二重の堀切で防御し、その反対側の尾根筋の先端に、海岸部を望見できる出丸状の曲輪を築いている。

このようにみると、佐部城跡も当初は在地領主層の城館として築かれ、その後の堀内氏の南進時に侵攻拠点として利用されたと理解してもよいだろうか。今後の研究の進展に期待したい。また、那智勝浦町の市屋城跡(図1-103)も、立地や構造に共通性が認められる<sup>36)</sup>。

いずれにせよ、文献史料からは状況が把握しづらい地域においても、城館の動態より海岸部を意識した立地をとる「海への意識」への共通性を見出すことができ、それらの築城主体と海との密接な関係を想起せざるを得ないだろう。

熊野に盤踞する在地領主層と城館群について概観してきた。次章で、安宅氏城館跡を含めた熊野水軍の城館をまとめたい。

## 五 熊野水軍の城館の特質 —まともにかえて—

安宅氏は、日置川下流域を本拠としながら、沿岸部を中心とした富田川流域にも影響を及ぼしている状況を確認した<sup>37)</sup>。城館の分布と文字資料の内容が合致する事例である。安宅氏は、熊野三山の影響下にありながら、守護権力の動向に左右されつつ、自らの領域は自立的に支配することが可能であった在地の領主層といえる。また、近隣の同規模の在地領主層と起請文を交わし、あたかも一揆的な結合を示しているようにもみえる<sup>38)</sup>。

これらの熊野水軍の動態は、戦国大名が「いぞ現れえなかつた紀伊国、さらに付言すれば、熊野という歴史地理的空間の特徴といえよう。

熊野三山を核に緩やかに結びついていたと評される熊野水軍であるが<sup>39)</sup>、先述した安宅氏・周参見氏と小山氏(久木・西向)との城館の分布・構造の差異については、熊野三山からの影響の多寡に起因すると考える。たとえば、本宮の御師と考えられる音無氏や和田氏については、築城規制があつたと想定されており、同様の事例として捉えることができよう<sup>40)</sup>。

近年の研究成果では、安宅氏が新宮衆徒の一員であつたと指摘されているが、比較的短期間であつたとみられ、享徳四年(一四五五)の一揆契状以外では確認されていない<sup>41)</sup>。このことは、逆説的に十五世紀後半以降には、熊野三山勢力とはある程度距離を置くようになったことを示しているともいえる。十五世紀後半から十六世紀初頭にかけての山城の築造時期と重複する点に注目しておきたい。もちろん、出月宮棟札(写)で検討したように、熊野三山との関係性は有していただろうが、直接的な影響下からは脱していたのかもしれない。このことが、他の熊野水軍の城館の在り方との差異を如実に現しているのだろう。



久木小山氏については、地理的にみても影響が寡少とも指摘できるが、御師としての側面を強調するならば、熊野三山に（心理的に）近いともとれる。いずれにせよ、御師としての活動実態が不明な現状においては、判断は保留としたい。

次に、熊野の各地域ごとの様相について整理しておきたい。

#### (1) 熊野西部

熊野西部は、安宅氏、周参見氏、久木小山氏が勢力圏としていた。安宅氏城館跡のように、排他的な領域支配を志向した戦略的な城館の配置もみられる。ただし、熊野三山（那智山）勢力や守護（畠山氏）勢力と完全に無縁だったわけではない。一方、久木小山氏のように、積極的に城館を築かない領主層も確認できる。

#### (2) 熊野南部

城館の分布が疎らな地域であり、西向小山氏（二部小山氏）や高川原氏以外は、実態が掴みにくい伝承上の小領主が多い。例外的に虎松山城跡が技巧的かつ規模が大きいが、基本的に単純な構造の城館が多数を占める。規模としては小さくなるが、安宅氏や小山氏に準じる在地領主層と捉えることができよう。また、田子川流域でも小河川にともなう在地領主層が確認されるが、城館が確認されていない事例もある。

#### (3) 熊野東部

那智大社や速玉大社、堀内氏の勢力圏とみられるが、泰地氏や色川氏や太田川流域の在地領主層も存在した。戦国時代後半代（天正期以降）の伝承をもつ城館が残る。

#### (4) 熊野北東部

熊野川以北の地域である。鶴殿氏や榎本（有馬）氏のように、社家勢力が主だったものようだ。榎本（有馬）氏の領域では、のちに堀内氏に吸収されるが、多くの城館を築いている。

#### (5) 熊野北部

様相が不明瞭な地域である。基本的に本宮大社の影響が強いとみられ、本宮周辺、中辺路沿いの城館については、先述のとおり熊野三山の規制があったとの指摘がある<sup>40</sup>。

最後に、熊野水軍安宅氏が築いた城館の特質を述べて、結論とした。安宅荘成立の具体的な時期については不明であるが、鎌倉時代後期には執権北条氏の直轄領として「関東成敗地」となっており、それ以前の鎌倉時代前期までは熊野別当家が支配する所領であったと推測されている。

遺物の出土状況から鑑みると、十二世紀以降には安宅地域に集落が営まれていたと確実に認められることと一致する。また、安宅氏は鎌倉時代末期に執権北条氏により阿波より派遣されたといわれるが、それ以前に「原安宅氏」というべき在地領主がいたことが文献史料から指摘されている<sup>41</sup>。その「原安宅氏」は、十四世紀以前にはすでに活動しているようである。その後、南北朝期には安宅氏が安宅荘周辺で精力的に活動している様子が文献史料や寺社造営への関与等から読み取ることができ、安宅氏居館跡（安宅本城跡）は、出土遺物に裏付けられるように、領主層の動向と軌を一にしながら、海運や流通の本拠地として営まれていたと考えられる。

安宅荘の山城は、軍事的緊張による必要性から築かれたと考えられ、八幡山城跡（詰城）や要害山城跡（境目の城）のように、その帰属時期は十五世紀後半から十六世紀初頭というきわめて狭い範疇に収まると想定される。この軍事的緊張は、文献史料から語られる畠山氏の内訌に密接に関与しているのだろう<sup>42</sup>。勝山城跡（「安宅南要害」）のように文献史料上で確認できる例でも、十六世紀初頭の時期と考えられているため、考古学上の成果と矛盾しない。また、時代が少し下るが、出月宮棟札（写）からも、要害山城跡周辺まで安宅氏の影響力が及ぶ範囲であったと指摘できた。

安宅氏城館跡は、水運の拠点である本拠「安宅氏居館跡」を中心に、戦略的に自らの領域に城館を配置している。なかでも八幡山城跡は、居館の詰城でありつつ、河口部も望見が可能な「海への意識」が強い熊野の城館の特徴を備えている。

その一方で、田野井地域の中山城跡はやや様相が異なる。十五世紀後半から十六世紀初頭の遺物も出土するが、十六世紀後半の遺物も同様の割合で出土し、さらに十七世紀代の肥前陶磁器も確認される。他の山城と比較して、長期間に亘り城館としての機能が維持されていたとみられ、<sup>(4)</sup>様相としては安宅本城跡（安宅氏居館跡）に近くなる。また、出土土器類の組成や出土数からも、八幡山城跡・要害山城跡と中山城跡の相違がみられ、安宅氏（もしくは田井氏）による城の利用形態が異なっていたことに起因するとみられる。中山城跡の位置づけについては今後のさらなる検討を期したいが、安宅地域の城館（八幡山城跡・勝山城跡など）と異なるコンセプトのもと機能していた可能性は指摘できるであろう。

また、考古資料としては、これまでは瀬戸内海沿岸側からの搬入品である備前焼が主な検討対象であったが、南伊勢系土器や山茶碗、常滑焼に代表されるような伊勢湾沿岸側からの搬入品についても、より詳細な検討を進めたい。

自らの力量不足を棚に上げ、熊野の城館における広範囲かつ多種多様な対象を取り上げようと試みたが、はなはだ雑駁な議論に終始してしまつた。とくに安宅氏以外の熊野水軍の城館の動態の把握とその比較検討は大きな課題である。検討しなければならぬ課題は、熊野の雄大な峰々よりも幾重にも重なっているが、今後の研究の深化を約し、ひとまずは筆を擱きたい。

本稿を作成するにあたっては、「熊野水軍小山家文書の総合的研究」

のメンバーをはじめ、とくに伊藤徳也、伊藤裕偉、北野隆亮、坂本亮太、白石博則、竹田憲治、日出神社総代の諸氏より、ご指導及び資料の実見・提供といったご配慮を頂いた。末筆ではありますが、記して感謝申し上げます。

また、紙幅の都合上、割愛した報告書等が多くあるが、ご寛恕願いたい。『日置川町史 第一巻 中世編』日置川町史編さん委員会編 二〇〇五、『戦国和歌山の群雄と城館』和歌山城郭調査研究会編 戎光祥出版二〇一九、『図解 近畿の城郭』I-V 城郭談話会編 戎光祥出版二〇一四、二〇一八、『和歌山城郭研究』第一五号、第一九号 和歌山城郭調査研究会 二〇一六、二〇二〇、伊藤徳也『再発見 東紀州の城』二〇一九、伊藤裕偉『聖地熊野の舞台裏』高志書院 二〇一一、坂本亮太『春季特別展 戦乱のなかの熊野—紀南の武士と城館—』和歌山県立博物館編 二〇二〇は、全体を通じて参照させていただいた。

本文中の図表については、すべて筆者が作成した。また、本文中の土器の色調は『新版 標準土色帳二〇〇六版』による。

#### 注

- (1) 一般的な熊野の範囲は、近代の和歌山県の西牟婁郡・東牟婁郡、三重県の北牟婁郡・南牟婁郡を指すことが多いが、本稿では、近世以前に志摩国の範囲と目される北牟婁郡を除外した範囲としている。概ね和歌山県田辺市〜三重県尾鷲市間である。熊野の範囲については、稿を改めて論じたい。
- (2) 『南紀熊野ジオパークの地質と地形』二〇一六 南紀熊野ジオパーク推進協議会、『南紀熊野ジオパーク 3つの大地と出会う』二〇一八 南紀熊野ジオパーク推進協議会
- (3) 桑原康宏『熊野の集落と地名 紀南地域の人文環境』清文堂出版 一九九九
- (4) 坂本亮太による本書所収「総論 熊野水軍小山家文書の総合的研究

- ―熊野の海域史・序論〕や「熊野水軍と紀州小山家文書」『軍記と語り物』五六 二〇二〇などが挙げられる。
- (5) 『日置川町史 第一巻 中世編』日置川町誌編さん委員会編 二〇〇五で、古文書史料や淡路の城館から比較検討されている。
- (6) 本章については、拙稿「日置川流域と安宅氏城館跡」『軍記と語り物』五六 二〇二〇より抄出・補訂しているため、ご参照されたい。
- (7) 安宅氏の来歴については、『日置川町史 第一巻 中世編』日置川町誌編さん委員会編 二〇〇五や『熊野水軍のさと 紀州安宅氏・小山氏の遺産』高橋修編 清文堂出版 二〇〇九、『安宅荘中世城郭群総合調査報告書』白浜町教育委員会・安宅荘中世城郭群総合調査委員会編 二〇一四、『安宅荘中世城郭群総合調査報告書補遺編』白浜町教育委員会編 二〇一九を参考としている。
- (8) 北野隆亮氏のご教示による。備前焼編年については、間壁忠彦『考古学ライブラリー60 備前焼』ニュー・サイエンス社 一九九一に準拠する。
- (9) 伊藤裕偉「アうつわ」が語る熊野」『聖地熊野の舞台裏』高志書院 二〇一一
- (10) 長谷川眞「播磨における土製煮炊具の様相」『中近世土器の基礎研究』二一 日本中世土器研究会 二〇〇七を主として、岡田章一・長谷川眞「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第三号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 二〇〇三、『兵庫県文化財調査報告第二七〇冊 兵庫津遺跡Ⅱ（浜崎・七宮地区の調査）』〔本文編〕』兵庫県教育委員会編 二〇〇四や十河良和「堺環濠都市遺跡出土の土師質土器・炮烙について」『関西近世考古学研究』Ⅳ 関西近世考古学研究会 一九九六を参考としている。
- (11) 兵庫津遺跡（前掲 兵庫県教育委員会編 二〇〇四）や堺環濠都市遺跡（前掲 十河一九九六）でも、同様の形態が確認される。
- (12) 伊藤裕偉氏のご教示による。伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Me history』VOL.1三重歴史文化研究会一九九〇
- (13) 伊藤裕偉「補論三 南伊勢系土師器の分布」『中世伊勢湾岸の湊津と地域構造』岩田書院 二〇〇七
- (14) 前掲 伊藤裕偉 二〇〇七
- (15) 北野隆亮氏の代表的な業績として、本書所収「紀伊半島における中世の備前焼流通」のほか、「備前焼流通からみた紀伊水道内海世界」『港津と権力』中世都市研究会編 二〇一九、「和歌山県における中世備前焼の流通」『紀伊考古学研究』第五号 紀伊考古学研究会 二〇〇二や「考古遺物」『日置川町史 第一巻 中世編』日置川町誌編さん委員会 二〇〇五がある。
- (16) 高橋氏らの業績は、前掲（7）の二書のほか、「海辺の水軍領主、山間の水軍領主―紀州安宅氏・小山氏の成立とその基盤―」『鎌倉遺文研究』一六 二〇〇五が挙げられる。坂本氏の業績については、前掲（4）のほか、「熊野水軍小山氏をめぐる資料（2）―神宮寺小山家文書―」『和歌山県立博物館紀要』第三号 二〇一七でも、一部で安宅氏について取り上げられている。
- (17) 高橋修「信仰をめぐる領主と住民」『日置川町史 第一巻 中世編』日置川町誌編さん委員会 二〇〇五の第I部通史編第二章第三節
- (18) 前掲（17）
- (19) 史料の実見にあたっては、日出神社総代にご配慮いただいた。
- (20) 坂本亮太「一〇 門善坊旦那持分指し出帳」『熊野那智御師史料―旧宝蔵院所蔵史料の翻刻と解題―』阪本敏行・長谷川賢二編 二〇一五
- (21) これらの援助・介入を具体的に示す史料は、現時点では確認できていないため、今後の課題事項である。藤白（藤代）は、藤白神社関係の大名で現れており、他とやや様相が異なる。
- (22) 藤岡英礼「紀南地方における十六世紀初頭の築城様相―特に高瀬要害山城とその周辺をめぐって」『和歌山城郭研究』第一七号和歌山城郭調査研究会 二〇一八。
- (23) 神社建立に際して、奉加がどれくらいの期間で実施されていたのか詳細な検討が必要となる。
- (24) 本書資料編Ⅰ・文書史料一 紀州小山家文書「1 久木小山家文書―中安宅俊正相博状【六一号】、安宅実俊起請文【二〇号】」
- (25) 坂本亮太「熊野水軍と紀州小山家文書」『軍記と語り物』五六 二〇二〇
- (26) 伊藤裕偉「榎本一族と熊野」『聖地熊野の舞台裏』高志書院 二〇一一。また、同じく伊藤裕偉氏による「棟札資料論―紀伊国牟婁郡入



- 鹿八幡宮と地域社会の変遷』『三重県史研究』第三五号 二〇二〇がある。棟札の資料的価値を見出す方法論を整理され、入鹿八幡宮における棟札群について検討されている。非常に有用な視点を提示されており、今後、日置川流域の棟札群の再検討についての課題が整理されている。
- (27) 坂本亮太『特別展きのくにの城と館—紀中の戦国史—』図録 和歌山県立博物館編 二〇一四
- (28) 堀口健次『藤原城跡—』図解 近畿の城郭Ⅱ』城郭談話会編 二〇一五
- (29) 本書所収拙稿「四すさみ町藤原城跡の中世考古資料」及び白石博則『藤原城跡』『和歌山城郭調査研究』第一七号 二〇一八
- (30) 前掲(25)
- (31) 鶴殿西遺跡の調査については、「新宮紀宝道路調査ニュース うどのNo.1」三重県埋蔵文化財センター二〇一八、「新宮紀宝道路調査ニュース うどのNo.2」三重県埋蔵文化財センター二〇一九といった現場説明会資料を参照しているが、詳細については調査報告書の刊行を待ちたい。
- (32) 坂本亮太「紀州における別峯大殊の足跡」『和歌山地方史研究』第七九号 二〇二〇でも、紀伊半島南西端周辺の本拠景観の特徴と指摘されている。なお、虎松山城跡については、規模・構造ともに、安宅氏や周参見氏の城館と遜色のない水準のものである。実際の築城主体については、より詳細な検討が必要である。
- (33) 和歌山県教育委員会「すさみ串本道路建設に伴う分布調査」『和歌山県埋蔵文化財調査年報—平成二八年度—』二〇一八
- (34) 白石博則「市屋城跡」『和歌山城郭研究』第一九号 二〇二〇
- (35) ただし、時期的な変遷が伴うことを念頭に置いておきたい。また、富田川流域の生馬荘の日吉神社の棟札より、永正一七年(一五二〇)の建立時に安宅氏が関与している事例も確認されている。
- (36) 本書資料編Ⅰ「文書史料—紀州小山人家文書—」1 久木小山人家文書—中安宅光定起請文【七四号】が代表的であるが、一揆的結合という表現が適切かどうかは、さらに議論が必要である。
- (37) 前掲(4)
- (38) 藤岡英礼「戦国期における在地城館の構成秩序について—紀伊 国奥熊野地方熊野三山領域を中心として—」『中世城郭研究』第一一号 一九九七
- (39) 前掲(26) 及び坂本亮太『春季特別展 戦乱のなかの熊野—紀南の武士と城館—』図録 和歌山県立博物館編 二〇二〇
- 今後事例が増える可能性もあるが、現時点では安宅氏と新宮の関係性を見出せる唯一の史料となっている。
- (40) 前掲(37)
- (41) 高橋修「安宅氏の系譜」『日置川町史 第一巻 中世編』日置川町誌編さん委員会 二〇〇五の第I部通史編第一章第三節
- (42) 前掲(4)に詳しいが、畠山氏の内訌が一五世紀後半から一六世紀初頭にかけて、富田川・日置川流域まで戦線が南下していることが、指摘されている。
- (43) ただし、そもそもの遺物出土量の僅少さをどう評加するかも、今後の検討課題である。